

宮島のサクラ

広島大学大学院統合生命科学研究科附属宮島自然植物実験所 坪田 博 美

千葉県立中央博物館共同研究員 中原-坪田美保

キーワード：植栽、野生種、栽培品種、観光資源、生物多様性

はじめに

サクラは日本文化の中である一定の位置を占めており、日本を代表する植物のひとつと言える（三次 1938、小川 1993、Kuitert & Peterse 1999、牧野 2002、井筒 2007、勝木 2015、2018）。本稿では広島県廿日市市宮島町でみられるサクラについて述べたい。なお、サクラという標準和名の植物は存在しないが、本稿ではバラ科Rosaceaeの狭義のサクラ属*Cerasus*の植物およびそれに関係する栽培品種全般をさす意味でサクラと表記する。

植栽・栽培されるサクラの仲間は落葉性の樹木で、春に開花するのが一般的であるが、秋から冬にかけて開花する種・栽培品種もある。サクラと呼ばれるものの中には、自然界のどこかに自生している野生種や、人が直接的・間接的に関与することで作られた栽培品種がある。野生種は主に北半球の温帯を中心に約100種が知られ、広範囲に分布するが、日本には10種が知られている（木原ほか 2007、Katsuki 2018、勝木 2018）。栽培品種の中には、野生種から特定の性質を持つものを人が選抜することで成立したものと、野生種や栽培品種が自然交配あるいは人為的に交雑することでつくられたものが含まれる。なお本稿では、野生種の和名についてはカタカナで、栽培品種の和名については左右の単一引用符で囲んだ‘漢字・ひらがな’で表記することとする。ただし、原文の引用の場合は原文の表記を尊重した。以下、宮島のサクラの歴史と、現在宮島の市街地周辺でみられるサクラの野生種と栽培品種の特徴、生物学的な視点からみた課題について述べる。なお、広島大学デジタル自然史博物館の「宮島のサクラ」でも各サクラについて紹介している（図1）。



図1. 広島大学デジタル自然史博物館の「宮島のサクラ」のページのQRコード。

宮島のサクラの歴史

広島県廿日市市宮島町は秋の紅葉とともに春のサクラが現在では観光資源のひとつになっている。もともと宮島にはサクラの野生種の自生があるが、観光資源になっているサクラの多くは人為的な交配や選抜でつくられた園芸品種や宮島に自生しない野生種であり、いずれも植栽されたものあるいは稀に逸出したものである。いつ頃から宮島でサクラが植栽されるようになったのか正確な記録が残っておらず不明な点が多いが、江戸時代の資料にサクラとされるものの記録がいくつか残っている。谷川（2019）にある、17世紀の江戸時代に制作されたと考えられている『吉野厳島図屏風』（4-7ページ）では吉野側にはヤマザクラやその系統の品種とわかる状態でサクラが花や若い葉とともに描かれているが、宮島側にはサクラと解釈できる植物は描かれていない。一方、18-19世紀の江戸時代に制作されたと考えられている『厳島図屏風』（20-21ページ）ではサクラとも解釈できる植物が市街地だけでなく広い範囲で多く描かれている。このため、これがサクラとすると今現在であればヤマザクラと解釈できる。また、現在同じような分布をする植物で白い花を咲かせるものは常緑樹クロバイがあり、こちらも開花時は遠方から樹全体が白くみえるほどである。同じく江戸時代後期の『厳島圖會』（岡田・山野 1842、福田 1973も参照）にはサクラに関する記述や挿絵が多く存在する。挿絵の反橋看花の図（三ノ三十一）では、花見に興じる17名の男女やシカとともに、広葉樹が描かれている。これは、皮目（ひもく）が目立つことからサクラと解釈できる。また、大經堂より眺望の圖（二ノ十六）には角のあるシカやサルとともにヤマザクラと解釈できる樹が描かれてい

る。理由としては、皮目が目立ち、5枚の花弁で、開花時に展葉が始まっている状態が描写されていることがあげられる。鳥居松（二ノ四十二）や寶物拝見の挿絵（六ノ二）にも開花したヤマザクラが描かれている。その他にも、例えば、長濱蛭子社（三ノ三）や櫻川（三ノ四）、大元神社（三ノ三十五）、大元櫻花（三ノ三十七）などの描写がサクラに該当する。ただし、屏風や図会の描写はあくまでもデフォルメなどが加わっていたり、描いた本人が宮島そのものをみて描いていなかったりという可能性もあることを考慮する必要はある。例えば三浦（2011）では、『嚴島圖會』を引用しながら「（大元）神社の周りは桜の名所で、『嚴島図絵』（127ページ）にも桜の満開の様子が描かれています」との解説がある。同じ文献の中で、大聖院や大願寺の周辺にも同じような植物が描かれている。ただし、植物学的な観点から考えると、本当にそれらの描写のすべてがサクラであったのかどうか疑問が残る。その理由として、描かれたサクラとされる開花した状態の樹木が‘染井吉野’のように花だけを描いたように見えることや、サクラの樹形とはやや異なるものが存在するためである。現在日本人のサクラの典型的なイメージである‘染井吉野’は江戸時代の末にできた栽培品種で、『嚴島図絵』の時代にはまだ存在していない。また、‘染井吉野’などのエドヒガン系栽培品種は開花が展葉に先行するという特徴がある。それ以外の栽培品種に多いサトザクラ系栽培品種の一部や自生するヤマザクラは開花時期に展葉するため、これらのサクラであった可能性もある。また、ヤマザクラと考えられるサクラであっても時代や画風によっては‘染井吉野’のように花だけが描かれたものもあるので現時点での結論は出るものではないが、所（1897）の中のウメに関する表記や桃林という地名、当時のサクラの栽培品種などから考えると現在でも庭園で利用されているウメやモモなど別の植物も検討に値する。一方、市街地やその周辺以外ではより確実にヤマザクラが優性であったと考えられる。例えば、宮本（2003）には江戸時代の宮島での山の管理や杓子などの手工業の材料との関係でサクラの記述がある。その中に、明治20年頃まではヤマザクラが開花する時期には実に美しかった旨当時のことを記憶する古老が語ったとの記述がある。この記述は、先の『嚴島図屏風』や『嚴島圖會』などのヤマザクラと解釈できる描写と矛盾しないとともに、現在の植生の遷移からも説明ができる。明治以降になると、サクラが植栽されてきたことを示唆する資料も残されている。例えば、広島森林管理署に残る資料によれば、明治期に大元公園からの旧陸軍道路沿いに2,000本以上のサクラが植栽されたことが示唆される。しかし、その際に植栽されたと考えられるサクラは現在該当すると考えられる生存木は見あたらない。また、本多（1913）により示された『嚴島公園改良案』の中でサクラの植栽に関する記述がみられる。嚴島公園の改良に際して、その時点で交互に混植された松と桜を、将来的には海岸の方に松を植栽して外並木とし、内側には桜だけを植栽して内並木とすると良いとする旨述べられている。これらの記述から考えると、大正期には現在の市街地が含まれる範囲にすでに桜の植栽が行われていた可能性が高い。その一方で、佃（1983）は江戸時代以降近世の山林の管理体制や利用とその規制、災害についてまとめているが、この中でサクラの植栽についてはまったくふれられていない。また、近畿中国森林管理局（2003）によれば森林施業としては明治後期から始まっているが、ここでもアカマツやクスノキ、ヒノキなどを目標樹種にする方針がある程度でサクラの植栽についての記述はない。これらのことから考えると、江戸・明治期はサクラを積極的に植栽したという資料はなく、市街地以外の山では山林の利用の影響でヤマザクラが自然に芽生えて生育していたと考えられる。これらの記述や実際の樹の大きさから判断すると、現在サクラが多く見られる市街地については、大正以降の時期に植栽されたものと考えられる。また、植栽されたサクラの多くはヤマザクラではなく、明治になって広まった‘染井吉野’のような園芸品種やエドヒガンのような宮島には自生しない野生種が主と推定される。

加藤（1939）は狭義のサクラ属 *Cerasus* としてエドヒガンとヒガンザクラ（コヒガンザクラ）、ヤマザクラをあげている。また、堀川（1942）は、野生種を念頭においた報告ではあるが、狭義のサクラ属としてケオオヤマザクラ（ウスゲヤマザクラ）とヤマザクラをあげている。これらの報告から、昭和のはじめの頃には宮島には野生種だけでなく栽培品種も植栽されていたことがわかる。第二次世界大戦後に現在市街地でみられるサクラの大部分が植栽されたと考えられる。関ほか（1975）では、おもに野生種を念頭におい

た報告であり、先行研究の報告を引用する形も含めたものであるが、狭義のサクラ属としてエドヒガン、コヒガンザクラ、ヤマザクラ、ウスゲヤマザクラをあげている。宮島の自然観察編集委員会（1978）は宮島の植物を一般向けに紹介した文献であるが、その中ではモミジに関する紹介はなされているが、サクラに関する紹介はない。内田ほか（2014）ではソメイヨシノ、オオシマザクラ、サトザクラ、エドヒガン系のサクラ、ヤマザクラを紹介している。その後、宮島のサクラに関して詳しい報告はなされていない。

宮島島内でみられるサクラ

宮島の市街地やその周辺で多くのサクラが観察できる。被子植物全般で言えることであるが、サクラもその外部形態、とくに花（花弁数や萼など）や葉（形や鋸歯）、毛の有無などの形態的特徴で見分けることができる。また、近年DNAを使った研究も進んでおり、栽培品種の関係や起源について新しい知見が得られつつある。ここでは宮島島内でみられるサクラについてその特徴や生育場所を記す。なお、著者らがすべての個体を確認できたわけではないので、見落としている品種や植栽場所がある点ご了承頂きたい。また、今後の研究のため情報提供頂ければ幸いである。

宮島島内でみられる代表的なサクラとして、‘一葉’（イチヨウ）、エドヒガン、オオシマザクラ、‘河津桜’（カワヅザクラ）、‘関山’（カンザン）、‘枝垂桜’（シダレザクラ）、‘染井吉野’（ソメイヨシノ）、‘東海桜’（トウカイザクラ）、‘八重紅枝垂’（ヤエベニシダレ）、ヤマザクラ、‘陽光’（ヨウコウ）があげられる（2019年4月現在、和名順）。以下、各種について、標準和名・‘品種名’、開花期、花の形態的特徴、サイズ・樹高・樹形、生育場所などを和名順に記す。学名は森林総合研究所多摩森林科学園サクラデータベース（多摩森林科学園 2015）やYList（米倉・梶田 2003-）を参照した。各サクラの特徴については、木原ほか（2007）や三次（1938）、勝木（2015、2018）、広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所（2009）、青山ほか（2018）などを参照しながら、宮島で観察した結果を反映させた。花期については、宮島の個体で、ここ10年程度の期間で観察された花期を示したが、年によって前後二週間くらいの変動はある。なお、広島県内であっても地域間で花期の違いが存在し、例えば開会時期の詳細がわかっている東広島市西条と廿日市市宮島では、二週間程度の違いが存在する場合もある〔東広島市については、青山ほか（2018）を参照〕。

1. ‘一葉’ *Cerasus Sato-zakura* Group ‘Hisakura’ : イチヨウ。

ヤマザクラ群サトザクラ系栽培品種。4月中旬-4月下旬開花。花は八重（花弁数20-25）で大輪、花径5 cm。花弁は咲きははじめが淡紅色で、徐々に白化する。雌しべは普通1本で、下半部が葉化して鋸歯を持つ。萼片は全縁またはわずかに鋸歯が存在する。樹幹は生長すると樹皮に縦裂を生じることが多い。宮島島内では市街地やその周辺で観察できる。

2. エドヒガン *Cerasus spachiana* Lavalée ex H.Otto var. *spachiana* f. *ascendens* (Makino) H.Ohba: 江戸彼岸。別名、タチヒガン、アズマヒガン、ウバヒガン。

野生種で、本州の岩手県以南から九州に自生する。3月中旬-3月下旬開花。花は一重で小輪。花弁は白色から淡紅色。萼片に鋸歯がある。萼筒はつぼ形で、上部がくびれ、基部に近い部分が丸く膨らむ。花柱基部に毛があり、子房は毛がないまたは上部に毛がある。小花柄や萼に開出毛が多い。葉柄にも毛が多い。開花が先行し次いで葉が展開。古くから観賞用として栽培。傘状の樹形。幹は直径1 m超、樹高30 mに達する高木になる。老木は天然記念物指定されたものが多い。栽培品種の母種のひとつで、多くのエドヒガン群栽培品種が存在する。和名は彼岸の頃に開花することから。加藤（1939）にあるように過去に報告があるが、宮島には自生と考えられる樹はなく、市街地で現在みられるものはいずれも植栽と考えられる。宮島島内では大元公園から市街地やその周辺などで観察できる。

3. オオシマザクラ *Cerasus speciosa* (Koidz.) H. Ohba : 大島桜。別名、タキギザクラ (薪桜)。

野生種で、伊豆諸島に自生する。伊豆半島や房総半島にも野生個体が知られる。3月下旬-4月上旬開花。花は大きめで一重であるが、半八重の個体あり。花弁は白色で、長さ2cm程度。萼片は大型で鋸歯が目立ち、長さ10mm弱。葉は大型で幅8cm以上、厚みがあり、両面無毛。葉身の裏面はやや光沢がある。葉柄は無毛。葉身は全長の中央付近の幅がもっとも広くなる。葉の先端は次第に細まり尾状になる。葉身基部は丸くなるか、広いくさび形になる。鋸歯は単鋸歯でときどき重鋸歯が混ざり、鋸歯の先端が長く伸びる。開花が先行し次いで葉が展開、若葉は緑色。本種の葉には芳香があり、塩漬けにした葉を桜餅に利用する。材も有用。ヤマザクラやエドヒガンなどとともに多くの栽培品種の元になっている。高木になるが、成長が早く、薪として使われたことから別名タキギザクラ (薪桜) と呼ばれる。宮島島内では大元公園から市街地、杉ノ浦、包ヶ浦までの広い範囲で観察できる。

4. ‘河津桜’ *Cerasus* × *kanzakura* ‘Kawazu-zakura’ Tsunoda & Funatsu : カワヅザクラ。別名、カワズザクラ。

カンヒザクラ群栽培品種で、オオシマザクラとカンヒザクラの自然交雑と推定されている。2月中旬-3月下旬開花。花は一重で、花径3cm。萼片・花弁は淡紅紫色。葉はやや厚い。極めて早咲き。1955年(昭和30年)頃、静岡県賀茂郡河津町で原木が見つかり、河津町に多く植栽されている。河津町に原木があることから、1974年(昭和49年)にカワヅザクラと命名された。1975年(昭和50年)に河津町の町の木にも指定されている。類似した栽培品種として、同じ野生種の交雑種と考えられているシュゼンジカンザクラやオオカンザクラ、ヨウコウなどがあげられる。宮島島内では滝町の民有地に比較的最近になって植栽されている。

5. ‘関山’ *Cerasus* Sato-zakura Group ‘Sekiyama’ : カンザン。別名、セキヤマ。

ヤマザクラ群サトザクラ系栽培品種。4月中旬-4月下旬開花。花は八重(花弁数20-45)で大輪、花径5cm。花弁は紅紫色。花弁はねじれ、花の内側の花弁が立ち上がる傾向があり、花の中央部が盛り上がる。萼片は平坦で、ほとんど鋸歯がない。萼片や萼筒に光沢があることが多い。雌しべは2本で、柱頭と花柱上部を残して葉化し、葉化部分は鋸歯があり緑色。葉は単鋸歯が多く、鋸歯片が細かい。樹幹は平滑。花を塩漬けにして桜湯にする。宮島島内では市街地やその周辺で観察できる。

6. ‘枝垂桜’ *Cerasus spachiana* ‘Itosakura’ Siebold : シダレザクラ。別名、‘糸桜’ (イトザクラ)、『糸枝垂桜’ (イトシダレザクラ)、『紅枝垂’ (ベニシダレ)。

エドヒガン群栽培品種で、エドヒガンの一品種。3月中旬-4月下旬開花。花は一重で小輪、花径2cm程度。花弁は白色から淡紅色、さらに紅紫色。変異が大きく、個体によって花色や花のサイズはさまざま。開花が先行し次いで葉が展開する。葉身は長楕円形。高木になるが枝が垂れ、全体として枝垂れる樹形となる。古くから栽培され大木になり、各地で天然記念物に指定されたものが多い。花色が濃い紅色のものを‘紅枝垂’と呼んで分ける場合もあるが、花色の変異が大きいため最近では白色のものから紅色のものまでも含めて‘枝垂桜’と呼ぶことが多い。サトザクラ系栽培品種の‘仙台枝垂’ (センダイシダレ) も同様に枝垂れる樹形となるが、‘枝垂桜’とは起源が異なる。宮島島内の市街地やその周辺に植栽されており、網之浦や大元公園、御手洗川、宮島フェリーターミナル周辺などで観察できる。

7. ‘染井吉野’ *Cerasus* × *yedoensis* (Matsum.) Matsum. & Suzuki ‘Someiyoshino’ : ソメイヨシノ。

エドヒガン群栽培品種で、江戸時代末期から明治時代以降に全国に広まった。3月下旬-4月上旬開花。花は一重で中輪。花弁は淡紅白色。花弁は散りやすい。開花が先行し次いで葉が展開する。花付きが良く成長が早い。現在では日本全国に広く植栽されている品種で、花見のサクラの代表。‘染井吉野’は稔性が

低く、接ぎ木で苗が作られるため、全国で見られる‘染井吉野’はクローンですべて遺伝的に同じものである。このことを利用して開花予想（桜前線）が発表される。長年エドヒガンとオオシマザクラの雑種と考えられてきたが、最近DNAを使った研究でエドヒガンやオオシマザクラ、ヤマザクラなど複数の野生種が関与していることが明らかになっている（Kato et al. 2014）。宮島ではもっとも多く植栽されており、市街地全域を中心に大元公園から包ヶ浦までの広い範囲で観察できる。

8. ‘東海桜’ *Cerasus* ‘Takenakae’ Ohwi : トウカイザクラ。

シナミザクラ群栽培品種で、シナミザクラ（別名、カラミザクラ）*C. pseudocerasus* (Lindl.) G.Donとコヒガンザクラ*C. subhirtella* (Miq.) Masam. & S.Suzuki ‘Kohigan’の雑種と推定されている。3月中旬-4月上旬開花。花は一重で小輪、花径2.5 cm前後。花弁は淡紅色で、先端の色が多少濃くなる。萼筒はあまり膨らまない。小花柄に開出毛がある。萼にわずかに毛があるかまたは無毛。萼片の基部に少数の鋸歯と縁毛がある。花柱・子房とも無毛。においが強め。葉長は8 cm程度。生長しても小高木程度の大きさで、樹形が箒状または盃状になり、樹幹から気根が発生しやすいなどの特徴がある。花付きが良く細い枝にも多くの花をつける性質があり、切り花に利用される品種。類似した栽培品種として、推定母種のコヒガンザクラやマメザクラ*C. incisa* (Thunb.) Loisel.などがあげられる。宮島島内では大元公園に植栽されているが本数は少ない。

9. ‘八重紅枝垂’ *Cerasus spachiana* ‘Plena-Rosea’ Miyoshi : ヤエベニシダレ。別名、エンドウザクラ（遠藤桜）。

エドヒガン群栽培品種。4月上旬-4月中旬開花。花は八重（花弁数15-20）で、花径2.5 cm。花弁は淡紅紫色。開花が先行し次いで葉が展開。葉身は長楕円形。‘枝垂桜’同様に枝が垂れ、枝垂れる樹形となる。古い栽培品種。八重咲き品種であるが、他の品種と異なり雄しべや雌しべの数が減らないという特徴がある。宮島島内では市街地で観察できる。

10. ヤマザクラ *Cerasus jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H.Ohba var. *jamasakura* : 山桜。

野生種で、本州の宮城県以南から九州に自生する。広島県では島嶼部から沿岸部、中国山地にかけて広く分布。（2月下旬-）3月中旬-4月中旬（-4月下旬）に開花。花期は個体間の差が大きい。花は一重。花弁は白色。果実は5月中旬-6月上旬に成熟し、黒紫色になる。葉の展開と同時に開花し、新葉が赤みを帯びる。葉身は長楕円形で長さ約10 cm、小さな鋸歯がある。若葉では微毛があるが、葉の表面や裏面および萼片は無毛になり、葉の裏面は粉白色。蜜腺はいぼ状で、葉柄に付く。落葉高木で、成木になると20 m以上に達する。宮島島内に生育する大木としては、室浜砲台跡やあてのき浦のものが知られている（広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所 2009、坪田ほか 2019）。宮島にも自生しており、島内の広い範囲で生育が確認できる。自然林で見られるが、遷移段階の比較的初期の明るい環境にあらわれる。

‘染井吉野’と異なり、開花するころには新芽が展開し始めている。また、カスミザクラよりも開花時期が早い。個体としてはおおよその花期は決まっているが、個体間の開花時期の差や地域差が大きく、種としてみると花期が長期にわたる。宮島では、明治時代以前から開花時期の早いヤマザクラが知られている。岡田・山野(1842) (福田 1973も参照) の『嚴島圖會』(三ノ廿五) の革籠崎(ごうごさき)の項目の次に、「早咲櫻 同所にあり 睦月の末既に花開きて香色ことに愛すべし」とある。睦月は現在の1月下旬から3月上旬頃に該当する時期になる。同じサクラと思われる記述が所(1897)にもあり、「革籠崎 七浦ノ外是處早櫻有雨水ヨリ十日ヲ過ス蕾ヲ破早薇アリ同時に拳ヲ擢ス」(84ページ)とある。雨水が現在の2月19日か20日頃であり、啓蟄（現在で言えば3月6から8日頃）よりも前と解釈できるので、おおよそ一致する。革籠崎は宮島の南西部にあるが、これらから考えて江戸時代後期に、2月か3月はじめに開花するヤマザクラがあったことがわかる。また、マツ枯れが広がった時期である1973年2月1日に現地で開花が確認さ

れている（関、私信）。現在でも、例えば江ノ浦（よのうら）や宮島南西部などに、2月下旬-3月中旬に開花する個体がある。その一方で、4月下旬になっても開花している個体がある。また、開花期間が長い個体があることも知られており、宮島としてみるとかなりの期間開花がみられることになる。宮島のような狭い地域でも個体間の形態変異も大きいため、宮島も含む瀬戸内海のヤマザクラの集団についてはDNAを使った研究を行う必要がある。

宮島自然植物実験所周辺のヤマザクラについて、室浜砲台跡の上にあったヤマザクラは二重から半八重のものがあつた当時の標本が広島大学植物標本庫（HIRO）に残っている（HIRO-MY-9218）。また、現在宮島自然植物実験所がある場所の山側にも大きなヤマザクラがあり、これらのヤマザクラは対岸の大野からもみることができ、農作業の目安にもなっていたとのこと（関および豊原、向井、私信）である。

11. ‘陽光’ *Cerasus* ‘Yoko’ : ヨウコウ。

カンヒザクラ群栽培品種。3月下旬-4月上旬開花。花は一重で、花径4.5 cm。萼片と花弁は淡紅紫色。花は下垂して咲く。萼片は全縁で無毛。開花が先行し、次いで葉が展開する。葉の表面は無毛で、裏面は脈上に毛。愛媛県出身の高岡正明氏によりカンヒザクラとサトザクラ系栽培品種の‘天城吉野’（アマギヨシノ）との交雑によって作出された。近年各地で植栽されるようになった品種で、宮島島内では宮島フェリーターミナル付近に植栽されている。

以上にあげたサクラ以外に、カスミザクラ *Cerasus leveilleana* (Koehne) H. Ohbaが大元公園付近にあった（関、私信）とのことであるが、著者らはまだ確認できていない。また、ここで解説したサクラの野生種や栽培品種は、広島大学デジタル自然史博物館〈<https://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/~main/>〉でも一部が紹介されている（広島大学デジタル自然史博物館の「宮島のサクラ」のページへは、図1のQRコードでアクセス可能）。

生物学的な視点からみた課題

坪田（2014）が述べたように、宮島の市街地のサクラの大部分は植栽されたものである。また、観光圧力（オーバーツーリズム）や手入れ不足が原因と考えられるサクラの樹勢衰退が認められる。落葉性のサクラの類で宮島に自生しているものはヤマザクラだけであり、それ以外の栽培品種はすべて植栽されたものである。自生種であるヤマザクラについては、今後植生の遷移が進むことで生育に適さない環境になる可能性が高い。このため、長期的には減少することが予想される。一方、栽培品種については市街地に多く植栽され、その多くで環境不適合や樹の老化、根元の踏みつけ、病虫害など複数の要因によって生育障害や生育不良、樹勢の衰退が認められる。とくに2000年頃からは、世界遺産指定に伴う観光客の増加や夏の気温上昇により衰退する樹が目立つようになったと考えられる。また、森林に近い場所では日照の不足が原因と考えられる樹勢衰退が認められ、環境が適していないことがその原因のひとつと推測される。

宮島島内のサクラについて、積極的な管理はあまり行われてこなかったが、宮島島内外の有志が2005年頃から調査と保全活動を行っている。それが母体となり、「さくらもみじの会」が2010（平成22年）に設立されたNPO法人「宮島ネットワーク」の事業部会として活動を行っている。この団体の2005-2006年の調査資料によれば、約2,000本のサクラが市街地やその周辺で確認され、エドヒガン、オオシマザクラ、シダレザクラ、ソメイヨシノ、ヤマザクラ、その他の品種が認められている（向井、私信）。現在の宮島ではモミジと並んでサクラも観光資源になっており、これを維持するためにはNPO法人などを中心に、施肥や土壌改良、罹病枝・枯枝除去、病虫害への対応、枯損木の除去と植樹など積極的な管理を今後行う必要がある。また、現状では安全性や工事のためという必要性が優先され、過度に伐採される傾向がある。伐採後に同じ場所に新しいものを植える傾向があるが、現状ある樹については歴史的な経過もふまえて最大限活かし大切に管理すべきと考える。一方、現状では植栽木の置き換えに限っては植栽が許可される場合

が多く、この際自生していない栽培品種の植栽が行われることが多い（廿日市市生涯学習課によれば平成22－31年で21件の許可申請あり）。とくに近年は、開花時期が早く派手な色合いのカンヒザクラ系の栽培品種が多く植栽される傾向がある。文化財保護法の関連ではとくに問題とされない場合が多いが、生物多様性の観点からは大きな問題を引き起こす可能性があり、自生しない種・栽培品種の植栽については生物多様性の保全、とくに遺伝的多様性の攪乱の観点から注意が必要である。広島県教育委員会（2007）による宮島の保存管理計画の中では、新たに植栽する場合は宮島島内にあるものを利用するという原則があげられている。これに従えば、持込は行わず、やむを得ず持ち込む場合も植栽には基本的に許可が必要と考えられる。しかしながら、現実では原則が守られていない例が散見される。将来的に持ち込まれた栽培品種との交雑の可能性を考えると、今後この原則を徹底する必要があると考える。また、ヤマザクラの項目で触れたが、宮島の自生種であるヤマザクラの瀬戸内海集団については集団遺伝学的な研究を行う必要がある。このような研究の結果、2018年に新種記載されたクマノザクラのような発見の可能性もある（Katsuki 2018）。たとえ新種でなくとも、在来の集団はその土地の歴史を反映したものであり、遺伝子資源としても守る必要がある。サクラは雑種を頻繁に作ることが知られており、植栽された他地域の個体との間で交雑が進むと宮島の集団固有の性質も失われる可能性が否定できない。このため今後は、遺伝的多様性を維持する観点から原則自生のヤマザクラに限定し、文化財や観光面だけでなく生物多様性の維持の観点からもサクラの扱いを考える必要がある。

宮島のサクラを守る上で研究や教育、普及活動も重要である。千葉県立中央博物館（2003）は、浮世絵や絵葉書から房総の原風景を読み解いている。宮島についても自然を描写した屏風や図会が多く残されており、千葉の例と同じような観点からその内容を解釈することで、サクラを含めた植物や植生の理解が今後可能と考えられる。サクラに関する植物学的な知識の普及や地元への社会貢献として、広島大学は、同大学院統合生命科学研究科附属宮島自然植物実験所を中心に活動を行ってきた。例えば、宮島島内でのサクラに関する活動への協力や、広島大学デジタル自然史博物館でのサクラ開花情報の提供を行っている。現在、広島大学総合博物館と共同で「広島県サクラガイドブック（仮称）」の編集も計画している。また、宮島弥山を守る会と協力して宮島産の種子に由来するヤマザクラの苗木作りを開始している。この苗木については獅子岩駅周辺や宮島島内の豪雨災害の復旧工事の際の植生回復にも活用する計画である（坪田ほか2017）。このような活動を通じて、宮島のサクラを将来に残して行きたいと考えている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、宮島島内でのサクラの分布や分類、開花時期、文献、標本、写真に関する情報を提供頂いた、関 太郎博士（広島大学名誉教授）、豊原源太郎博士（元宮島自然植物実験所助教授）、坪田 宏博士（元森林総合研究所管理官）、向井誠二氏（元宮島自然植物実験所職員）、池田誠慈氏（広島大学総合博物館）、上村恭子氏（広島市）、紙本由佳理氏（宮島自然植物実験所）、阪本愛氏（愛媛大学SSC、2学年）、内田慎治氏（広島大学技術センター）、過去の宮島島内での植林・植樹に関する情報を提供頂いた廿日市市生涯学習課、榎原佳子氏（広島森林管理署）、サクラの調査や情報提供でご協力頂いた宮島学園および宮島幼稚園の教職員の皆様、さくらもみじの会と宮島弥山を守る会、宮島地区パークボランティアの会の皆様にお礼申し上げます。

引用文献（和文あいうえお順、英文アルファベット順）

- 青山幹男（写真）・広島大学総合博物館 広島大学博物誌出版WG（編集〔編集・発行：池田秀雄・山口富美夫・坪田博美・清水則雄・塩路恒生・山口信雄・池田誠慈・青山恵子/解説：池田秀雄・坪田博美〕. 2018. 広島大学東広島キャンパスのサクラ. 47pp. 広島大学総合博物館、東広島.
- 井筒清次. 2007. おもしろくてためになる桜の雑学事典. 254pp. 日本実業出版社、東京.

- 内田慎治・向井誠二・坪田博美. 2014. 宮島の桜. 宮島自然植物実験所ニュースレター 22: 1.
- 岡田 清 (編著)、山野峻峯斎 (画). 1842. 藝州嚴島圖會. 中島本町、広島. (早稲田大学図書館古典籍総合データベース、https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_e0225/index.html、2020年3月3日閲覧、および福田 (1973) 参照)
- 小川和佑. 1993. 桜と日本人. 221 pp. 新潮社、東京.
- 勝木俊雄. 2015. 桜. 228 pp. 岩波書店、東京.
- 勝木俊雄. 2018. 桜の科学. 191 pp. SBクリエイティブ、東京.
- 加藤 (林) 弥栄. 1939. 宮島植物誌. 植物趣味 8: 173-193、8: 256-274.
- 木原 浩 (写真)、大場秀章・川崎哲也・田中秀明 (解説). 2007. 新日本の桜. 263 pp. 山と溪谷社、東京.
- 近畿中国森林管理局. 2003. 世界文化遺産の森林景観の回復「森林景観の保全指針」作成のための調査報告書. 103 pp. 林野弘済会大阪支部、大阪.
- 関 太郎・中西弘樹・鈴木兵二・堀川芳雄. 1975. 厳島 (宮島) の維管束植物. 天然記念物瀨山原始林・特別名勝厳島緊急調査委員会 (編)、厳島の自然、総合学術調査研究報告、pp. 211-332 + pls. XLII-XLIII. 宮島町、広島.
- 谷川ゆき (編・著). 2019. 厳島に遊ぶー描かれた魅惑の聖地ー、展覧会ブックレット. 海の見える杜美術館、廿日市.
- 多摩森林科学園. 2015. 多摩森林科学園サクラデータベース. <http://db.ffpri.affrc.go.jp/sakura/home.php> (2020年2月29日閲覧)
- 千葉県立中央博物館 (監修). 2003. 野の花・今昔、房総の原風景とそこに生きた花・鳥・魚たち (平成15年度特別展解説書). 187 pp. うらべ書房、木更津.
- 佃 雅文. 1983. 近世の宮島の山林をめぐる人々の動き. 宮島の歴史と民俗 2: 9-17.
- 坪田博美. 2014. 宮島の自然ーその現状と課題ー. 厳島研究 10: (1)-(18).
- 坪田博美・宮本有希・諸石智大・内田慎治・中原・坪田美保・佐々木一寧. 2017. 世界遺産宮島の森林を教材にした小中大学連携ー宮島ロープウエー駅舎付近の植生回復を例にー. 厳島研究 13: (1)-(6).
- 坪田博美・小山克輝・松坂啓佑・向井誠二・中原・坪田美保・榎原佳子. 2019. 宮島国有林林野火災跡地の植栽地の現状ー植生回復状況の予備的調査ー. Hikobia 18: 41-55.
- 所 信文. 1897. 厳島名所志るべ. 102 pp. 厳島町. (国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/766075>、2020年3月3日閲覧)
- 広島県教育委員会 (広島県教育委員会事務局生涯学習部文化課 編). 2007. 特別史跡及び特別名勝厳島 保存管理計画. -vii + 94 pp. 広島県教育委員会、広島.
- 広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所 (編)、坪田博美・向井誠二. 2009. 宮島の植物と自然、8版. 160 pp. 広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所、廿日市.
- 福田直記 (編). 1973. 藝州嚴島圖會、上巻. 445 pp. 宮島町、広島.
- 堀川芳雄. 1942. 厳島の植物. 広島県教育委員会 (編)、広島県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯、pp. 157-212. + pls. 44-52. 広島県教育委員会、広島.
- 本多静六. 1913. 厳島公園改良案. 72 pp. + 厳島公園改良豫定圖. 広島県内務部、広島.
- 牧野和春. 2002. 新桜の精神史. 244 pp. 中央公論社、東京.
- 三浦正幸. 2011. 平清盛と宮島. 175 pp. 南々社、広島.
- 「宮島の自然観察」編集委員会 (編). 1978. 宮島の自然観察. 36 pp. 日本自然保護協会、東京.
- 宮本常一. 2003. 自然と日本人、宮本常一著作集43. 298 pp. 未来社、東京.
- 三次 學. 1938. 櫻. 467 + 4 pp. 富山房、東京. [1980年発行復刻版]
- 米倉浩司・梶田 忠. 2003-. BG Plants 和名、学名インデックス (YList). <http://ylist.info/> (2020年2月29日閲覧)
- Kato, S., Matsumoto, A., Yoshimura, K., Katsuki, T., Iwamoto, K., Kawahara, T., Mukai, Y., Tsuda, Y., Ishio, S., Nakamura, K., Moriwaki, K., Shiroishi, T., Gojobori, T. & Yoshimaru, H. 2014. Origins of Japanese flowering cherry (*Prunus* subgenus *Cerasus*) cultivars revealed using nuclear SSR markers. Tree Genet. Genomes 10: 477-487.
- Katsuki, T. 2018. A new species, *Cerasus kumanoensis* from the southern Kii Peninsula, Japan. Acta Phytotax. Geobot. 69: 119-133.
- Kuitert, W. & Peterse, A. 1999. Japanese Flowering Cherries. 395 pp. Timber Press, Portland.